HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『全体新論訳解』二種における振り仮名について ： 両者の訳述方法の差異による特徴差をめぐって
Author(s)	許, 春艶
Citation	国語国文研究, 147, 13-27
Issue Date	2015-10-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93157
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_147_13-27.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

『全体新論訳解』二種における振り仮名について
――両者の訳述方法の差異による特徴差をめぐって――

許　春艶

一　はじめに

『全体新論訳解』は漢文医学書『全体新論』の和訳書であり、明治六年（一八七三）から明治七年（一八七四）にかけて大阪で出版された高木熊三郎によるもの（以下高木『訳解』と略す）と、明治七年（一八七四）に名古屋で出版された石黒厚によるもの（以下石黒『訳解』と略す）の二種がある。[1]

『全体新論』はイギリスのロンドン会所属の宣教医ホブソンにより漢文で著され、咸豊元年（一八五一）、中国広州恵愛医館から出版された。[2]これは近代中国においてはじめて西洋医学を紹介した生理学入門書であった。日本へは嘉永末年（一八五四）ごろに伝わり、安政四年（一八五七）に翻刻された。明治時代に入ると、同名二種の『全体新論訳解』が出版された。

従来、『全体新論』に関しては医学史研究にとどまらず、言語資料として医学用語の研究も行われてきた。一方、『訳解』に関しては、飛田（一九七三）で翻訳資料として次のように言及する以外はほとんど取り上げられていない。

> 中国に渡った欧米の宣教師が漢訳した医学書「全體新論」の翻訳に「全體新論譯解」（明治七年）があるが、これは
>
> 男骨ハ堅クシテ稍ク長シ（巻一4ウ）
> 男女渾身ノ骨其ノ数タル相埒ク似タリ（同前）
>
> のように、難解かと思われる漢語にふりがながあり、右側は読み方、左側は意味（訳語）を示している。

飛田（一九七三）ではいずれの『訳解』を見たものかの言及がないが、二種の『訳解』と対照する限りでは、高木『訳解』を指していると思われる。この指摘は左右両側振り仮名の特色に触れたもの

である。[3] そこで、本稿では、高木『訳解』に加え、石黒『訳解』と対照しながら、それぞれの振り仮名の特徴を具体的に明らかにしたい。

近代の文章の振り仮名表記の使用状況、形態、用法は種々様々である。それらについての先行研究は非常に多く、さまざまな角度からの検討が行われている。ことに、振り仮名の表記面の問題、および漢字との関係については度々指摘されてきた。指摘の例として、進藤（一九八二）や京極（一九九三）における振り仮名型の分類、岩淵（一九八九）における振り仮名の四役割、大島（一九八九）における漢字と仮名の対応関係、そして、石井（二〇一二）における振り仮名と漢字の二重表記などが挙げられる。

この他に、振り仮名はテキストジャンルによる一定の違いが見られると論じる研究があり、本稿の観点にも深く関係する。京極（一九八一）では文章ジャンルによる使用実態の調査が行われ、文章のジャンルや表現形式により、その表記法が異なると指摘する。そして、細川（一九八九）では近代の振り仮名の実態調査について、次のように述べている。

> 従来、なぜ振り仮名が施されるのかという観点での個別的・選択的な研究はいくつかなされているものの、どのような場合にどのような形で振り仮名が付されるのか付されないのかという観点から具体的な基礎調査は意外に少ないのが現状である。今後、こうした観点からの資料調査および言語実態分析を急がねばなるまい。

さらに、振り仮名の研究は「語義や表現あるいは文体とのかかわりの方が強い」ことと、「振り仮名の問題は、すなわち漢字・仮名表記の問題であり、同時に和語・漢語の問題とも深くかかわっている」ことも指摘する。

細川（一九八九）以後の研究では、主として文芸作品を対象に振り仮名の実態調査が行われてきた。しかし、実用性のある文章において、振り仮名の表記法がどうなっているのかについて注目度はまだ低い。中でも、専門分野の翻訳文に見られる振り仮名の特徴差、および振り仮名から文体の差異や和語・漢語の問題が反映できるかどうかについての研究は十分ではない。

よって、本稿では同一の漢文を和訳した二種の『訳解』を取り上げて、それらに付された振り仮名の量的基礎調査を通して、両者の共通点と相違点を検討し、近代の文章の振り仮名表記の研究において、二種の『訳解』の資料的価値を明確したい。

二　研究資料

本稿では、石黒『訳解』は北海道大学図書館蔵本、高木『訳解』は国立国会図書館蔵本を使用した。[4] 二種の『訳解』とも、内容構成は『全体新論』と一致しているが、巻数が異なるため、各巻に収録される節に相違がある。

石黒『訳解』　縦22.0cm×横15.4cm

巻之一「第一身体略論～第八脳為全体之主論」全八節

巻之二「第九眼官部位論～第二十脾経」全十二節

巻之三「第二十一 心経～第三十九霊魂妙用論」全十九節
高木『訳解』 縦17.9cm×横12.2cm
巻一「身体略論第一～肌肉功用論第七」全七節
巻二「脳為全体之主論第八～耳官妙用論第十一」全四節
巻三「手鼻口官論第十二～肺経第二十五」全十四節
巻四「肺経呼吸論第二十六～霊魂妙用論第三十九」全十四節

三 二種の『訳解』の訳述方法

両者の訳述方法を見るために、和刻本『全体新論』と二種の『訳解』の序と本文の一部とを対照してみると、次の例一～例三の通りである。(5)

例一

凡ソ天下之物。莫シ不レ有ラ理。惟理有レリ未レタ窮。即知有レリ不レル盡サ。若シ能ク窮レ理有レ據トコロ。則不レ論セ何人言ヲ之ヲ。皆ナ當シ信ス之ヲ。
（和刻本『全体新論』序）

凡ソ天下ノ物理アラザルナシ。惟理イマダ窮メザルアリ。即チ知盡サザルアリ。若シ能ク理ヲ窮メ據ドコロアレバ。則何人コレヲ言フヲ論ゼズ。當ニ之ヲ信ズベシ。
（北大本石黒『訳解』序）

凡ソ天下ノ物ハ理アラザルモノナシ惟理ニ於テ未タ窮メサルアレバ即チ知ルコト未タ盡サヾルアリ若シ能ク理ヲ窮ムル據リドコロ有レバ則チ何人ノ之ヲ言フヲ論セスシテ皆ナ當ニ之ヲ信ズベシ。
（国会本高木『訳解』序）

例二

若久病ハ則肥網消滅、筋骨現露、乃僅存ニ皮肉一。
（和刻本『全体新論』乾 一オ）

若シ病久ケレバ則肥網消滅シ。筋骨現露シテ乃僅ニ皮肉ヲ存スルノミ。
（北大本石黒『訳解』巻之一 一ウ）

若シ病氣ニテ、久シク療治相合ヒ難ケレハ肥網漸ク消滅シテ、筋骨皆ナ現露シ、皮肉僅ニ存スルノミ。
（国会本高木『訳解』巻一 一ウ）

例三

婦人臨レ蓐時、必反ニ展於後一以寛ニ産門一。
（和刻本『全体新論』乾 十オ）

婦人蓐ニ臨ムノ時。必ス後ニ反展シテ。以テ産門ヲ寛ク。
（北大本石黒『訳解』巻之一 一五ウ）

婦人ノ産致シ蓐ニ臨ムトキ、必ス後ニ反展テ以テ産門ヲ寛ク。
（国会本高木『訳解』巻一 二三オ）

二種の『訳解』は、漢字片仮名交じり文で記され、振り仮名が付される点では共通している。

例一と**例二**を見ると、石黒『訳解』は、和刻本『全体新論』の訓点に基づいた訓読文そのものである。市来（二〇〇八）の指摘するように、書き下し文は「原文漢字を保存する」という点で、「中間段

階の翻訳文」である。

一方、高木『訳解』は原文の書き下しにとどまらず、『全体新論』の原文の内容を展開した漢文訓読調の文体になっている。**例二**では原文に該当の漢文がないものの、「療治相合ヒ難ケレハ」と「漸ク」を書き加えており、**例三**では「産致シ」を書き加え、「病」を「病気」にするなどの変更を行っており、これらの変更を通して訓読文をわかりやすくしている。これは現代日本語翻訳の先駆となり、外国語を「自言語」で解釈する広義の翻訳と言えるだろう。

両書は同一漢文を和訳しているが、翻訳方法が異なり、採用した文体にも違いが見られる。石黒『訳解』が漢文訓読文であるのに対して、高木『訳解』が新たな翻訳文を模索しようとするものであると考えられる。

四　データベースの構築による振り仮名の分析

（一）振り仮名の取得方法

振り仮名の取得は、EmEditor、perlプログラムとMicrosoft Excelを使って、二種の『訳解』をテキスト化して行う[6]。石黒『訳解』と高木『訳解』の序、例言と正文の第八節までの内容をテキスト化の対象とする。次は二種の『訳解』序の一文目をテキスト化した例である。

I00z-001　凡（およ）ソ、天下（テンカ）ノ、物（モノ）、理（リ）、アラザル、ナシ。

T00z-001　凡（オヨ）ソ、天下（テンカ）ノ、物（モノ）ハ、理（リ）、アラザル、モノ、ナシ。

Iは石黒『訳解』、Tは高木『訳解』を表す。I00zは石黒『訳解』の序、続いて、I001は例言、I01は第一節を示す。データ処理に際して、自立語の数を計算するため、文を文節で区切り、コンマを入れる。漢字表記語に振り仮名の有無を把握するため、振り仮名があるものには原文のまま片仮名で表し、振り仮名がないものには読みを推定した平仮名を付す[7]。この平仮名を「補助読み」と呼ぶ。

さらに、前掲の文を次の**表一**と**表二**のように分類し、データベースを構築する。**表一**のI00z-001-01は石黒『訳解』序の一文目の一語目の所在を表す。「元データ」は文を文節で区切ったデータである。「書字形」は振り仮名を除いた原文文章のみを表す。「読み」は文節の読み方を示すものである。「漢字読み」は振り仮名読みと補助読みのどちらかが付される漢字表記語の読み方を示すものである。

（二）振り仮名の統計

次の**表三**と**表四**は、二種の『訳解』の序、例言および先頭から八節分のデータを集計したものである。表内の「文節数」は文節の数、すなわち、自立語の数を表す。「漢字表記語」は**表一**、**表二**の「漢字読み」に当たる。「交じり読み」は語の一部に振り仮名が付されていない漢字に「補助読み」をつける漢字表記語の読みを指す。

表三に示すように、石黒『訳解』では漢字表記語は自立語（文節）の約九割を占める。また、漢字表記語の約二割強に振り仮名がある。振り仮名は序に一番多く、次第にその比率がさがる。漢字表記語の初出に振り仮名を付して、その後に現れる同一語には付さず、重複

表一　石黒『訳解』I00z-001 の例

ID	元データ	書字形	読み	漢字読み	振り仮名読み	補助読み
I00z-001-01	凡(およ)ソ	凡ソ	およソ	およ		およ
I00z-001-02	天下(テンカ)ノ	天下ノ	テンカノ	テンカ	テンカ	
I00z-001-03	物(モノ)	物	モノ	モノ	モノ	
I00z-001-04	理(リ)	理	リ	リ	リ	
I00z-001-05	アラザル	アラザル	アラザル			
I00z-001-06	ナシ	ナシ	ナシ			

表二　高木『訳解』T00z-001 の例

ID	元データ	書字形	読み	漢字読み	振り仮名読み	補助読み
T00z-001-01	凡(オヨ)ソ	凡ソ	オヨソ	オヨ	オヨ	
T00z-001-02	天下(テンカ)ノ	天下ノ	テンカノ	テンカ	テンカ	
T00z-001-03	物(モノ)ハ	物ハ	モノハ	モノ	モノ	
T00z-001-04	理(リ)	理	リ	リ	リ	
T00z-001-05	アラザル	アラザル	アラザル			
T00z-001-06	モノ	モノ .	モノ			
T00z-001-07	ナシ	ナシ	ナシ			

を避ける傾向が見られる。振り仮名が付されなかった漢字表記語(補助読み)は七割強を占める。

一方、**表四**の示すように、高木『訳解』には自立語が石黒『訳解』より多い。漢字表記語は自立語の九割を占め、石黒『訳解』と近い比率である。振り仮名は八割の漢字表記語に付され、特に、序から正文にかけての漢字表記語で、比率が高い。残りの一割強を占める振り仮名が付されていない漢字表記語にも、その読みを示す振り仮名が語の前後に現れたものが多く見られる。すなわち、漢字表記語の読み方が示されていないものは非常に少ない。右側振り仮名は難字、難語だけではなく、代名詞や連体詞のような語にも振り仮名を付し、重複の語にも大量に付している。

二種の『訳解』の基本的な振り仮名は右側振り仮名である。左右両側振り仮名は少数あり、左側振り仮名は非常に少ない。

(三)　右側振り仮名の音・訓読みの統計

二種の『訳解』に現れた振り仮名の内、その多く占める右側振り仮名の音・訓読みの数を次の**表五**と**表六**に示す。音・訓読みは各節の右側振り仮名の占める割合を括弧内にパーセントで示す。

二種の『訳解』とも、音・訓読みと少数の例外がある。音読みについては、両者における序の差が一番小さいが、第5節のような差が大きい節もある。

訓読みは、高木『訳解』には石黒『訳解』に比べ、非常に多く現れる。一方、石黒『訳解』の序、例言には漢字表記語の半分以上に訓読みの振り仮名が付される。しかし、正文に入ると、音読みが約

表三　石黒『訳解』の文節と振り仮名 ※比率Ⅰは文節数を、比率Ⅱは漢字表記語を占める割合を(%)で表す

所在	文節数	漢字表記語 (比率Ⅰ)	振り仮名読み (比率Ⅱ)	補助読み (比率Ⅱ)	交じり読み (比率Ⅱ)	右側振り仮名	左右両側振り仮名	左側振り仮名
序	237	217(91.6)	153(70.5)	63(29.0)	1(0.5)	136	18	0
例　言	347	331(95.4)	210(63.4)	117(35.3)	4(1.2)	190	24	0
第1節	292	252(86.3)	92(36.5)	155(61.5)	5(2.0)	77	11	9
第2節	902	831(92.1)	193(23.2)	600(72.2)	38(4.6)	187	22	22
第3節	307	280(91.2)	60(21.4)	212(75.7)	8(2.9)	60	4	4
第4節	734	666(90.7)	153(23.0)	494(74.2)	19(2.9)	157	7	8
第5節	245	227(92.7)	52(22.9)	168(74.0)	7(3.1)	40	12	7
第6節	921	857(93.1)	189(22.1)	636(74.2)	32(3.7)	171	27	23
第7節	682	614(90.0)	91(14.8)	516(84.0)	7(1.1)	88	8	2
第8節	1,740	1,581(90.9)	232(14.7)	1,330(84.1)	19(1.2)	232	12	7
合　計	6,407	5,856(91.4)	1,425(24.3)	4,291(73.3)	140(2.4)	1,338	145	82

表四　高木『訳解』の文節と振り仮名 ※比率Ⅰは文節数を、比率Ⅱは漢字表記語を占める割合を(%)で表す

所在	文節数	漢字表記語 (比率Ⅰ)	振り仮名読み (比率Ⅱ)	補助読み (比率Ⅱ)	交じり読み (比率Ⅱ)	右側振り仮名	左右両側振り仮名	左側振り仮名
序	285	250(87.7)	223(89.2)	25(10.0)	2(0.8)	225	0	0
例　言	443	425(95.9)	264(62.1)	152(35.8)	9(2.1)	271	2	0
第1節	342	317(92.7)	246(77.6)	68(21.5)	3(0.9)	183	66	0
第2節	883	812(92.0)	649(79.9)	129(15.9)	34(4.2)	638	44	1
第3節	322	302(93.8)	251(83.1)	34(11.3)	17(5.6)	267	1	0
第4節	765	702(91.8)	578(82.3)	109(15.5)	15(2.1)	589	4	0
第5節	252	232(92.1)	173(74.6)	47(20.3)	12(5.2)	182	2	1
第6節	1,008	929(92.2)	823(88.6)	90(9.7)	16(1.7)	832	7	0
第7節	710	649(91.4)	556(85.7)	85(13.1)	8(1.2)	562	2	0
第8節	1,847	1,695(91.8)	1,538(90.7)	135(8.0)	22(1.3)	1,559	1	0
合　計	6,857	6,313(92.1)	5,301(84.0)	874(13.8)	138(2.2)	5,308	129	2

表五　石黒『訳解』の音・訓読み

	音	訓	音訓他	合計
序	52(38.2)	83(61.0)	1(0.7)	136
例　言	89(46.8)	101(53.2)	0(0.0)	190
第1節	51(66.2)	26(33.8)	0(0.0)	77
第2節	107(57.2)	78(41.7)	2(1.1)	187
第3節	39(65.0)	20(33.3)	1(1.7)	60
第4節	102(65.0)	55(35.0)	0(0.0)	157
第5節	30(75.0)	10(25.0)	0(0.0)	40
第6節	100(58.5)	71(41.5)	0(0.0)	171
第7節	57(64.8)	31(35.2)	0(0.0)	88
第8節	138(59.5)	93(40.1)	1(0.4)	232
合　計	765(57.2)	568(42.5)	5(0.4)	1,338

表六　高木『訳解』の音・訓読み

音	訓	音訓他	合計
55(24.4)	167(74.2)	3(1.3)	225
79(29.2)	186(68.6)	6(2.2)	271
58(31.7)	120(65.6)	5(2.7)	183
226(35.4)	399(62.5)	13(2.0)	638
31(11.6)	217(81.3)	19(7.1)	267
74(12.6)	494(83.9)	21(3.6)	589
21(11.5)	158(86.8)	3(1.6)	182
156(18.8)	652(78.4)	24(2.9)	832
129(23.0)	405(72.1)	28(5.0)	562
301(19.3)	1,204(77.2)	54(3.5)	1,559
1,130(21.3)	4,002(75.4)	176(3.3)	5,308

六割に及ぶ。音・訓読み以外の音訳語と音訓読みの混じり語はわずか五語である。高木『訳解』では訓読みが平均で七割以上を占める。訓読みを中心に振り仮名を付すことが見られる。また、音訳語の二語以外に、音訓読みの混じり語が石黒『訳解』より多く見られる。

要するに、序では二種とも訓読みに片寄るが、正文では石黒『訳解』は音読み、高木『訳解』は訓読みに片寄るという特徴が見られる。

（四）右側振り仮名の品詞統計

右側振り仮名の品詞を集計し、その結果を次の**表七**と**表八**に示す。さらに、音読みと訓読みの漢字表記語双方（音訓読みの混じり語と音訳語を除き）の品詞を調べ、次の**表九**と**表十**にまとめる。各品詞の比率は、**表七**と**表八**では合計、**表九**と**表十**では音訓合計に占める割合を括弧内にパーセントで示す。

二種の『訳解』とも、各品詞では、名詞が一番多く、ついで動詞が多い。音読みの品詞も両者ともに名詞が一番多く、次に動詞が多い。それ以外の品詞は少ない。しかし、訓読みでは、両者とも、名詞、動詞、副詞が多いが、量の多寡において名詞と動詞の順序が異なる。石黒『訳解』は動詞、名詞の順に多いが、高木『訳解』は名詞、動詞の順に多い。

表九と**表十**とを比べると、二種の『訳解』で訓読みは副詞、形容詞・形容動詞を除き、名詞、動詞、その他（接続詞）について、品詞構成比率の差が明らかである。音読みも訓読みほど顕著ではないが、品詞構成比率に差がある。音読みの場合、特に名詞と動詞につ

表七　石黒『訳解』の品詞の内訳　　※形容詞：形容動詞を含む

	名詞	動詞	形容詞	副詞	その他	合計
序	55(40.7)	41(30.4)	11(8.1)	14(10.4)	14(10.4)	135
例　言	84(44.2)	64(33.7)	11(5.8)	26(13.7)	5(2.6)	190
第1節	45(58.4)	23(29.9)	5(6.5)	4(5.2)	0(0.0)	77
第2節	89(48.1)	59(31.9)	23(12.4)	13(7.0)	1(0.5)	185
第3節	37(62.7)	18(30.5)	2(3.4)	2(3.4)	0(0.0)	59
第4節	75(47.8)	62(39.5)	9(5.7)	8(5.1)	3(1.9)	157
第5節	25(62.5)	10(25.0)	5(12.5)	0(0.0)	0(0.0)	40
第6節	96(56.1)	49(28.7)	15(8.8)	9(5.3)	2(1.2)	171
第7節	36(40.9)	45(51.1)	4(4.5)	3(3.4)	0(0.0)	88
第8節	103(44.6)	82(35.5)	17(7.4)	20(8.7)	9(3.9)	231
合　計	645(48.4)	453(34.0)	102(7.7)	99(7.4)	34(2.6)	1,333

表八　高木『訳解』の品詞の内訳　　※形容詞：形容動詞を含む

	名詞	動詞	形容詞	副詞	その他	合計
序	90(40.5)	57(25.7)	16(7.2)	20(9.0)	39(17.6)	222
例　言	101(38.1)	88(33.2)	18(6.8)	38(14.3)	20(7.5)	265
第1節	79(44.4)	46(25.8)	12(6.7)	19(10.7)	22(12.4)	178
第2節	337(53.9)	156(25.0)	30(4.8)	44(7.0)	58(9.3)	625
第3節	142(57.3)	59(23.8)	14(5.6)	8(3.2)	25(10.1)	248
第4節	265(46.7)	155(27.3)	38(6.7)	44(7.7)	66(11.6)	568
第5節	102(57.0)	40(22.3)	16(8.9)	10(5.6)	11(6.1)	179
第6節	413(51.1)	197(24.4)	62(7.7)	51(6.3)	85(10.5)	808
第7節	233(43.6)	165(30.9)	29(5.4)	44(8.2)	63(11.8)	534
第8節	673(44.7)	423(28.1)	77(5.1)	140(9.3)	192(12.8)	1,505
合　計	2,435(47.4)	1,386(27.0)	312(6.1)	418(8.1)	581(11.3)	5,132

表九　石黒『訳解』の音・訓読みの品詞の内訳

※形容詞：形容動詞を含む

	音読み						訓読み						音訓
	名詞	動詞	形容詞	副詞	その他	合計	名詞	動詞	形容詞	副詞	その他	合計	合計
序	43(31.9)	7(5.2)	0(0.0)	0(0.0)	2(1.5)	52(38.5)	12(8.9)	34(25.2)	11(8.1)	14(10.4)	12(8.9)	83(61.5)	135
例　言	66(34.7)	17(8.9)	4(2.1)	2(1.1)	0(0.0)	89(46.8)	18(9.5)	47(24.7)	7(3.7)	24(12.6)	5(2.6)	101(53.2)	190
第1節	37(48.1)	13(16.9)	1(1.3)	0(0.0)	0(0.0)	51(66.2)	8(10.4)	10(13.0)	4(5.2)	4(5.2)	0(0.0)	26(33.8)	77
第2節	73(39.5)	24(13.0)	10(5.4)	0(0.0)	0(0.0)	107(57.8)	16(8.6)	35(18.9)	13(7.0)	13(7.0)	1(0.5)	78(42.2)	185
第3節	31(52.5)	8(13.6)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	39(66.1)	6(10.2)	10(16.9)	2(3.4)	2(3.4)	0(0.0)	20(33.9)	59
第4節	62(39.5)	37(23.6)	3(1.9)	0(0.0)	0(0.0)	102(65.0)	13(8.3)	25(15.9)	6(3.8)	8(5.1)	3(1.9)	55(35.0)	157
第5節	23(57.5)	5(12.5)	2(5.0)	0(0.0)	0(0.0)	30(75.0)	2(5.0)	5(12.5)	3(7.5)	0(0.0)	0(0.0)	10(25.0)	40
第6節	75(43.9)	23(13.5)	2(1.2)	0(0.0)	0(0.0)	100(58.5)	21(12.3)	26(15.2)	13(7.6)	9(5.3)	2(1.2)	71(41.5)	171
第7節	34(38.6)	21(23.9)	2(2.3)	0(0.0)	0(0.0)	57(64.8)	2(2.3)	24(27.3)	2(2.3)	3(3.4)	0(0.0)	31(35.2)	88
第8節	86(37.2)	41(17.7)	11(4.8)	0(0.0)	0(0.0)	138(59.7)	17(7.4)	41(17.7)	6(2.6)	20(8.7)	9(3.9)	93(40.3)	231
合　計	530(39.8)	196(14.7)	35(2.6)	2(0.2)	2(0.2)	765(57.4)	115(8.6)	257(19.3)	67(5.0)	97(7.3)	32(2.4)	568(42.6)	1,333

表十　高木『訳解』の音・訓読みの品詞の内訳

※形容詞：形容動詞を含む

	音読み						訓読み						音訓
	名詞	動詞	形容詞	副詞	その他	合計	名詞	動詞	形容詞	副詞	その他	合計	合計
序	49(22.1)	6(2.7)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	55(24.8)	41(18.5)	51(23.0)	16(7.2)	20(9.0)	39(17.6)	167(75.2)	222
例　言	61(23.0)	15(5.7)	2(0.8)	1(0.4)	0(0.0)	79(29.8)	40(15.1)	73(27.5)	16(6.0)	37(14.0)	20(7.5)	186(70.2)	265
第1節	49(27.5)	8(4.5)	0(0.0)	1(0.6)	0(0.0)	58(32.6)	30(16.9)	38(21.3)	12(6.7)	18(10.1)	22(12.4)	120(67.4)	178
第2節	181(29.0)	37(5.9)	5(0.8)	3(0.5)	0(0.0)	226(36.2)	156(25.0)	119(19.0)	25(4.0)	41(6.6)	58(9.3)	399(63.8)	625
第3節	25(10.1)	6(2.4)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	31(12.5)	117(47.2)	53(21.4)	14(5.6)	8(3.2)	25(10.1)	217(87.5)	248
第4節	55(9.7)	14(2.5)	4(0.7)	1(0.2)	0(0.0)	74(13.0)	210(37.0)	141(24.8)	34(6.0)	43(7.6)	66(11.6)	494(87.0)	568
第5節	14(7.8)	7(3.9)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	21(11.7)	88(49.2)	33(18.4)	16(8.9)	10(5.6)	11(6.1)	158(88.3)	179
第6節	118(14.6)	25(3.1)	6(0.7)	7(0.9)	0(0.0)	156(19.3)	295(36.5)	172(21.3)	56(6.9)	44(5.4)	85(10.5)	652(80.7)	808
第7節	105(19.7)	20(3.7)	3(0.6)	1(0.2)	0(0.0)	129(24.2)	128(24.0)	145(27.2)	26(4.9)	43(8.1)	63(11.8)	405(75.8)	534
第8節	228(15.1)	65(4.3)	4(0.3)	3(0.2)	1(0.1)	301(20.0)	445(29.6)	358(23.8)	73(4.9)	137(9.1)	191(12.7)	1,204(80.0)	1,505
合　計	885(17.2)	203(4.0)	24(0.5)	17(0.3)	1(0.0)	1,130(22.0)	1,550(30.2)	1,183(23.1)	288(5.6)	401(7.8)	580(11.3)	4,002(78.0)	5,132

表十一　二種の『訳解』の左右両側振り仮名と左側振り仮名※両：左右両側振り仮名、左：左側振り仮名

	石黒		高木			石黒		高木			石黒		高木	
所在	両	左	両	左	所在	両	左	両	左	所在	両	左	両	左
序	18	0	0	0	第13節	16	1	2	0	第27節	5	0	0	0
例　言	24	0	2	0	第14節	13	3	0	0	第28節	4	0	0	0
第1節	11	9	66	0	第15節	5	0	0	0	第29節	1	0	0	0
第2節	22	22	44	1	第16節	0	0	0	0	第30節	2	0	0	0
第3節	4	4	1	0	第17節	4	0	1	0	第31節	5	0	0	0
第4節	7	8	4	0	第18節	3	0	0	0	第32節	1	0	0	0
第5節	12	7	2	1	第19節	2	0	0	0	第33節	4	0	0	0
第6節	27	23	7	0	第20節	5	0	0	0	第34節	5	0	0	0
第7節	8	2	2	0	第21節	4	4	2	0	第35節	6	0	0	0
第8節	12	7	1	0	第22節	4	0	0	0	第36節	3	1	0	0
第9節	11	15	0	0	第23節	10	1	1	0	第37節	2	0	0	0
第10節	8	0	0	0	第24節	9	0	0	0	第38節	6	1	0	0
第11節	15	4	0	0	第25節	1	0	0	0	第39節	1	0	0	0
第12節	33	3	4	0	第26節	26	1	3	0	合　計	359	116	142	2

いて品詞構成比率の差が大きい。

（五）　左右両側振り仮名と左側振り仮名

前述の通り、右側振り仮名が両書の基本である。また、両者ともに左右両側振り仮名があるという共通点がある。ここで、二種の『訳解』の序、例言と全三九節の正文にある左右両側振り仮名と左側振り仮名の数を調べた（**表十一**）。石黒『訳解』には高木『訳解』に比べ、左右両側振り仮名と左側振り仮名が非常に多い。左右両側振り仮名の分布について概観すると、石黒『訳解』では第16節に一つもないが、他の節では数が異なって分布している。高木『訳解』では左右両側振り仮名は第1節と第2節に集中し、計一一〇語ある。一方、石黒『訳解』では第1節と第2節において、左右両側振り仮名が付されているのは三三語しかない。

高木『訳解』は、**表六**が示すように、訓読みでは第3節以降が第1節と第2節より比率が上がっている。したがって、音読みでは第3節以降が減少している。また、**表三**の左右両側振り仮名が第1節と第2節に集中していることから見ると、高木『訳解』の振り仮名を付す方針が変わったことがわかる。このように、もともと左側にあるはずの訓読みが右側に付され、訓読みを大量に生み出している。さらに、**例三**「反展（ソリノビ）テ」のように振り仮名は地の文に滑らかに続くが、漢字には一種の「振り漢字」と呼ぶべき用法もある。これは、高木『訳解』の訳述方法の変更に伴い、振り仮名の付け方も変化した結果であると考えられる。

ここで、両書にある左右両側振り仮名の特徴について具体例を示

しながら述べる。**例二**「現露シ」の左右両側振り仮名では、石黒『訳解』は右に「ケンロ」、左に「アラハレ」を付し、高木『訳解』は右に「ゲンロ」、左に「アラハレ」を付す。このような、両書において、同じ漢字表記語に左右両側振り仮名が付される例はわずか一六語である。石黒『訳解』と高木『訳解』では難字・難語を判断する基準に非常に大きな相違がある。また、同じ漢字表記語であっても、右側の音読みが同じで、左側の振り仮名が異なるものがほとんどである。しかし、「聒頼」のように、石黒『訳解』には「カツキ・ヲロカ」、高木『訳解』には「カツクワイ・ミミシヒウナタル」を付すという例外がある。「頼」について、『康熙字典』によれば、音「キ」は『玉篇』に「痴頼不聰明也」という意味であり、音「クワイ」は『広韻』『集韻』に「音瞶義同」とある。そこで、石黒『訳解』には「キ」の音を付し、「おろか」の意味で「頼」を解釈する。一方、高木『訳解』には「クワイ」の音を付すが、「みみしい(聾)」の意味で「頼」を説明する。両書には音読みの異同が存在する。この異同は意味解釈の違いによるものである。

以上より、両書の左右両側振り仮名は右側が音読み、左側が訓読みを原則とする。しかし、例外もある。石黒『訳解』には次の例がある。(「・カナ」は左側振り仮名を示す)

① 優伶　イウレイ・ガクニン
(北大本石黒『訳解』巻一　十一オ)

② 声価　セイカ・ヒヤウバン
(北大本石黒『訳解』巻二　二十ウ)

③ 宇宙　ウチウ・セカイ　(北大本石黒『訳解』巻三　九オ)

④ 寒暑鍼　カンシヨシン・カンダンケイ
(北大本石黒『訳解』巻三　十八オ)

⑤ 穏婆　オンハ・サンバ　(北大本石黒『訳解』巻三　三一ウ)

①から⑤までの漢字表記語は、右側に漢語の音読み、左側に漢語と同義の別の音読みで示されている。左側の振り仮名で表す漢語はすでに社会に定着し通じやすかった一般語であると思われる。①と⑤は漢字表記語が日本語に存在しないため、当時の人々にわかりやすい同義語で解釈している。②③④は漢字表記語と左側の漢語は両方存在しているが、左側の振り仮名で示した漢語の役割が異なる。

②について、明治期に両方の音が存在するのは『日本国語大辞典』(第二版)で確認できる。「評判」で「声価」を解釈することは当時漢字語「評判」が「声価」より通じやすかったことを示している。

③について、『日本国語大辞典』(第二版)の「宇宙」に関する語誌には「中世になると、通俗辞書の類で『宇宙』にウチウの読みと共に、オホゾラ・アメノシタ・アメガシタなどの訓が付けられるが、『日葡辞書』に『文書語』とあるように、まだ日常的な語ではなかったと思われる」と記述されている。「セカイ」で「宇宙」を説明する理由としては明治初期にも「宇宙」が一般語ではなかったからと考えられる。

④について、「寒暖計」は江戸末期にオランダ語“Hygrometer”の訳語として現れ、のちに幕末期に英語の“Thermometer”の訳語となる。筆者の調査によれば、明治初期の物理教科書を見ると、「寒暑針(鍼)」と「寒暖計」はどちらも世間一般に使われていた語であるが、「寒暖計」の方が圧倒的に多用されていたことがわかった。[8] 石黒

『訳解』において、左側振り仮名「カンダンケイ」を付して、「寒暑鍼」を解釈するのは「カンシヨシン」より一般的であったことを反映していると言える。

一方、高木『訳解』には、左右両側振り仮名について、次のような例がある。

① 縷述　ルジユツ・一一イトノ如クノブ
（国会本高木『訳解』例言　二ウ）

② 字典　シテン・コウキジテン
（国会本高木『訳解』巻一　二オ）

③ 血管　ケツクハン・チノクダ
（国会本高木『訳解』巻一　二ウ）

④ 始生　シセイ・シユツセウ
（国会本高木『訳解』巻一　三ウ）

①は左側の振り仮名が句の形で、「縷述」の意味を説明する。特に「縷」字について細かに説明する。②はどんな「字典」であるのかを説明する。③は左側振り仮名で示した訓読みが各漢字の訓読みである。④は同義語の音読みを付す。以上の例が示すように、左側の振り仮名は多様で、難字や難語を説明し、『訳解』の文章で重要な役割を果していると言える。

以上のことから、両書にある左右両側振り仮名を通して、明治期の漢字表記語の使用状況とその定着を考察できると考えられる。振り仮名と和語・漢語との関係の一端を窺う資料として、今後も調査したい。

五　終わりに

以上より、二種の『訳解』には振り仮名が豊富に付されており、近代日本語における字音や語彙などを考察する際に有益な資料であることがわかった。しかし、ほぼ同時期に出版された二種の『訳解』はその訳述方法に異同がある。石黒『訳解』は漢文訓読文であり、高木『訳解』は漢文訓読にとどまらず、語レベルの翻訳もしており、単なる漢文訓読文とは異なる。この異同により、両書の振り仮名の付け方にも相違が見られる。両書の共通点と相違点をまとめると、次の通りである。

（1）石黒『訳解』は音読みに片寄って振り仮名を付すが、高木『訳解』は訓読みに片寄って振り仮名を付す。

（2）石黒『訳解』の音読みの品詞の量は名詞、動詞の順、訓読みは動詞、名詞、副詞の順に多い。高木『訳解』の音読みは名詞、動詞の順に多く、訓読みは名詞、動詞、副詞の順に多い。訓読みの方に品詞構成比率の差が顕著であるが、音読みでも品詞構成比率に差はある。

（3）二種の『訳解』では共通して難字、難語の左右両側に振り仮名を付し、右に音読み、左に訓読みの語や句で付す。しかし、高木『訳解』の第1節と第2節では左右両側振り仮名が大量に付されるが、第3節以降、そのほとんどが右側振り仮名に統一されている。本来左側振り仮名は訓読みを示すが、この変更により、訓読みの振り仮名はすべて右側に付される。

以上、両書の訳述方法の差から振り仮名の特徴と差異を分析してきた。石黒『訳解』では振り仮名はすべて付されているのではなく、必要な部分にのみ付される。ところが、高木『訳解』に振り仮名が付されていないものは非常に少なく、ほとんどの漢字表記語の読み方は振り仮名を通してわかるようになっている。高木『訳解』は振り仮名が多種多様であるため、飛田（一九七三）の指摘するように、近代語を考察する際に有効な資料として使うことができると結論することができる。

本稿は全文データベースの構築を通して、振り仮名の量的調査を行った。そして、これらのデータを使い、二種の『訳解』の振り仮名の特徴差についての分析を試みた。今後はこれらのデータを活用し、次の二点を考察したい。一つは振り仮名の統計と結び付けて、漢語を大量に創生する直前の和語・漢語の分析データとして、和語と漢語の差を含めた明治初期の語彙の実態を検討する。もう一つは品詞構成は基本的な文体指標であるので、両書の品詞構成を徹底的に調査し、振り仮名と文体の関わりに着目して両書の文体の特徴を考察したい。

注

（1）高木熊三郎は生没年不詳、大阪府平民、別称高木敕叔敵、嘉永元年（一八四八）大坂に歳寒書院を開き、明治元年（一八六八）書院を廃業した。明治以降に『修身要言』などの著作がある。石黒厚は生没年不詳、著書に『輿地新編』（一八七四）がある。

（2）ホブソン（Benjamin Hobson　漢名合信または霍浦孫）は一八一六年イギリスのWelfordに生まれ、一八三九年より二十年間、中国で医学活動を展開した。一八四八年広東の西郊に恵愛医館を開設。一八七三年ロンドン郊外で死去。著書の『全体新論』『博物新編』『西医略論』『婦嬰新説』『内科新説』をホブソン五書あるいは西医五書と総称する。自著の術語を整理した医学用語集『医学英華字釈』も出版されている。

（3）本稿では一語に左右両側ともに振り仮名がある場合、その振り仮名を「左右両側振り仮名」とする。また、語の左側にある振り仮名を「左側振り仮名」、右側にある振り仮名を「右側振り仮名」と定義する。

（4）北大本石黒『訳解』は国会本石黒『訳解』に比べ、左右両側振り仮名が多い。振り仮名の数について、北大本と一致するものは関西大学蔵本などがある。一方、国会本や東京大学洪庵文庫本などは北大本と異なる別の版である。北大本が新たに左側振り仮名を付した後印本であることは明らかである。

（5）本稿において、文献、資料などの引用をする際に、表記は次のように改める。

・和刻本の訓点は原文による。
・漢字の旧字体は原文に即することとして、入力できない場合は近い字体に直す。
・仮名の異体字・合字も現行の字体に直す。
・適宜、句読点を補う。

・本文中の傍点は基本的に省略する。

（6）EmEditor は Windows 用のテキストエディターであり、マクロ、ユニコードや巨大ファイル対応などが特徴である。EmEditor と Microsoft Excel を使うことで、テキスト化とデータ処理を効率よく行うことができる。

（7）本稿では漢字で表記されている語を「漢字表記語」と定義する。漢字の字数に限らず、漢字が含まれる語をすべて「漢字表記語」とする。

（8）筆者の二〇一一年度の修士論文（「明治期における近代漢語――物理教科書に現れた学術漢語を中心に――」〈北海道教育大学〉）において、「カンダンケイ」について物理教科書の使用状況を調べた。『日本国語大辞典』（第二版）の「寒暖計」に関する語誌を見ると、英語の thermometer の訳語として、近世末期から明治前期にかけて「驗温器（管・儀）」「寒暑規（鍼・針・表・計）」「寒暖計（器）」「熱計」などさまざまな語が造られたと記述されている。『物理階梯』では、「驗温器ハ大氣及ヒ他物ノ温度ヲ驗スルモノニシテ（中略）以テ寒暖ノ度ヲ定ム、故ニ世俗之ヲ寒暑鍼ト名ケ、又寒暖計ト呼ヒ」と述べる。調べた①～⑨の九種の物理教科書の中で、『博物新編訳解』では「寒暖針」に「カンダンケイ」と振り仮名が付される。それ以外の八種の物理教科書に「寒暖計」が用いられている。

①『訓蒙窮理図解』　福沢諭吉著　一八六八年

②『博物新編訳解』　ホブソン著　大森秀三訳　一八六八年～一八七〇年

③『物理階梯』　片山淳吉訳編　一八七二年

④『物理小誌』　宇田川準一訳編　一八八一年

⑤『小学校生徒用物理書』　後藤牧太他著　一八八五年

⑥『小学理科書』　小野太郎著　一八八七年

⑦『小学理科新書　甲種』　学海指針社編　一八九二年

⑧『小学理科教科書』　棚橋源太郎・樋口勘次郎著　一九〇〇年

⑨『尋常小学理科書』　一九一〇年

参考文献

石井久美子（二〇一二）「『安愚楽鍋』における振り仮名の研究」『国文』一一八　お茶の水女子大学国語国文学会

市来津由彦（二〇〇八）「漢文訓読の現象学――文言資料読解の現場から――」『「訓読」論――東アジア漢文世界と日本語――』勉誠出版

岩淵匡（一九八九）「振り仮名の役割」『講座日本語と日本語教育九　日本語の文学・表記（下）』明治書院

大島中正（一九八九）「表記主体の表記目的から見た漢字仮名並列表記形式――いわゆる振り仮名付き表記形式をめぐって――」『同志社女子大学学術研究年報』四〇（四）同志社女子大学

許春艶（二〇一四）「二種の『全体新論訳解』」『研究論集』一四　北海道大学大学院文学研究科

京極興一（一九八一）「振り仮名表記について」『信州大学教育学部

紀要』四四　信州大学教育学部
京極興一（一九九三）「漱石の振り仮名表記――『こゝろ』の場合――」『近代語研究　第九集』　武蔵野書院
斎藤文俊（二〇一一）『漢文訓読と近代日本語の形成』　勉誠出版
進藤咲子（一九八二）「ふりがなの機能と変遷」『講座日本語学六　現代表記との史的対照』　明治書院
田島優（一九九八）『近代漢字表記語の研究』　和泉書院
飛田良文（一九七三）「近代語研究の資料」『季刊文学・語学』　六六三省堂
細川英雄（一九八九）「振り仮名――近代を中心に――」『漢字講座　第四巻　漢字と仮名』　明治書院
森岡健二（一九九一）「素描・言文一致体の成立するまで」『近代語の成立　文体篇』　明治書院
文部省総務局（一八九〇―一八九二）『日本教育史資料八』
八耳俊文（一九九九）「19世紀漢訳洋書及び和刻本所在目録」『『六合叢談』（1857-58）の学際的研究』　白帝社
吉田寅（一九九六）「中国キリスト教初期医療伝道史研究――ホブソン著中国語医学書の一考察――」『立正大学文学部研究紀要』一二　立正大学文学部

（きょ　しゅんえん・北海道大学大学院博士後期課程）